

【実践報告】

教職実践演習（幼・小）（幼児教育コース対象）の報告

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 准教授 白石 崇人

1 はじめに

幼稚園教諭一種免許状および保育士資格の取得を希望する学生を対象とした「教職実践演習（幼・小）」（4年後期開講）は、教職課程の履修の全体を通じて身に付けるべき資質能力を最終的に形成・確認し、教員として求められる事項について研究と修養を深めることを目指す科目である。教員として求められる事項とは、次の4つを指す。

- ①使命感・責任感・教育的愛情などに関する事項
- ②社会性や対人関係能力に関する事項
- ③幼児児童理解に関する事項
- ④保育指導力に関する事項について

本科目では、以上を実現するために、指導案作成や模擬保育・場面指導などの演習、事例研究、グループ討議などを組み合わせて実施する。これらは、教職経験者を含めた複数教員の協力体制によって進められる。最終的には、現場の視点などを含む多角的な角度から、総合的に、教員としての資質・能力を評価する。

2 全30回のスケジュール

項目	時期	主な内容
第1パート (第1～10回)	9～10月	・ガイダンス ・教職履修カルテを用いた4年間の学修のまとめ ・現職教員または教育委員会による教育講演 ・模擬保育のおさらい・準備 ・現場の保育研究との接触（広島文教女子大学教育学会） ・日誌・事後報告書などを用いた教育・保育実習のまとめ
第2パート (第11～22回)	11～12月	・模擬保育（5・4・3歳児設定）×2回
第3パート (第23～25 ・29～30回)	12～1月	・保育者の倫理に基づく子育て支援に関する事例研究 ・保護者・地域対応に関するロールプレイ ・日誌・幼児指導要録・保育要録に関する幼児評価の演習 ・レポート「保育者とは何か」の作成
随時 (第26～28回)	9～1月	・保育・子どもに関する体験活動 (各自で、保育ボランティア、見学、研究会参加など)

3 平成27年度の実施概要

「教職実践演習（幼・小）」（幼児教育コース対象）は、平成25年度に初めて開講され、平成26年度に内容をリニューアルした。平成27年度は、平成26年度の反省を踏まえて若干再調整して実施した。ここでは、平成27年度の実施概要を記すことにする。

平成27年度の初等教育学科幼児教育コース生対象「教職実践演習（幼・小）」は、履修生49名について、第1グループ25名と第2グループ24名とに分けて実施した。その授業内容は、2の通り、大まかに3つのパートと体験活動とに分けられる。

第1パートでは、ガイダンスとこれまでの学修のまとめを中心に行った。まず科目趣旨と授業計画を説明した。次に、教職履修カルテを用いて、4年間の学修のまとめを課した。学生にとって4年間の学修というと、実習の印象が強すぎてそればかりになるため、ここでは、実習以外の講義・演習における学修成果をまずまとめることにした。実習については、これとは別回に、各実習で作成した日誌・保育指導案や事後報告書・報告会資料などを参照させて、実習ごとに具体的に学習成果をまとめる課題を課している。現職または教育委員会による講演については、今年度は特別支援保育についての講演を実施した。また、現場の保育研究との接触を経験するために、広島文教女子大学教育学会の年次大会への参加を促し、そこからの学びに関するレポートを課した。なお、同大会は、本学初等教育学科卒業生が集まって自分の保育・教育実践に関する研究成果を発表する場であり、学生たちが初めて触れる保育研究の場としてふさわしいものと考えている。今年度は10月25日に開催された。それから、第2パートにつなぐために、模擬保育や保育案立案の方法について復習を行った。

第2パートでは、模擬保育を行った。第1・2グループをさらに4～5名の小グループに分け、各小グループで保育指導案を計画する。模擬保育当日には、小グループから前半・後半の保育者役・観察者役をそれぞれ選定し、特別に役割のない学生は子ども役を務める形で実施した。当日役割を選定するのは、一部の学生に準備作業が偏らないようにして、指導案の計画・準備を全学生にまんべんなく経験させるためである。指導案の計画には、各小グループに指導教員が1名つき、時間内または課外に指導を行った。授業では、前半40分程度を使って、指導案に沿って模擬保育を行った。後半残りの時間では、検討会を開いて学生が主体となって振り返りを行い、指導教員もコメントを行った。

第3パートでは、子育て支援や保護者・地域対応、幼児評価に関する演習を行った。これらのテーマを取り扱ったのは、いずれも保育者に期待されている現代的問題だからである。講義に偏らないように、グループワークや活動中心の授業にした。

また、随時に、保育現場や子どもに関する体験活動について、合計15時間以上の体験活動を課した。これには、子どもや保育に関する研究会や講習なども認めた。

4 成果と課題

平成27年度「教職実践演習（幼・小）」について、模擬保育以外の成果と課題が3つ、模擬保育の課題が4つある。

模擬保育以外について、第1の成果は、4年間の学修振り返りについてである。今年度は、講義・演習の振り返りと実習の振り返りを分けた。また、知識・技術の修得だけでなく、社会性などの資質能力の修得・発展にも注目するように課した。これらの振り返りでは、履修カルテなどの具体的資料を用いることで、学生が自分に身につけている知識・技能・資質などを明確に認識できた。これらの資料は散逸しやすいので、早い学年からのポートフォリオづくりを意識的に計画すべきである。

第2に、現場の保育研究と接触する課題を課し、研究会などにおける学びの重要性について気づく機会を設けることができた。研究会や学会などは、実践家にはハードルの高いものだが、実践改善や力量向上において有意義である。研究会参加を通して学ぶことの有用性を実感することで、入職後にそのような機会を活用しようとする姿勢を芽生えさせることをねらった取り組みであった。

第3に、保育・子どもに関する体験活動を導入した。これに類する活動は平成25年度に実施されていた。平成26年度には、インターンシップ・ボランティア機会の恒常的確保の見込みが立たず、さらには4年次後期に保育現場にボランティアに出るということになると、保育現場の慣行上、就職活動と誤認されるおそれが極めて高いため、中止した。平成27年度には、児童教育コースの教職実践演習の取り組みにそろえることを念頭において、見学や研究会・講習参加などを含めて試行的に実施した。このような課外活動の習慣がある学生は、非常に活発な活動を報告し、中には126.5時間もの活動を報告した学生もあった。しかし、学生の多くはそのような習慣を持ち合わせないため、初動が非常に鈍く、活動時間の下限際の16～17時間の活動を報告するにとどまった。今後は、学生がスムーズに体験活動に参加できる体制を組み上げることが必要である。学生が参加した活動を大別すると、NPプログラムや中・四国保育学生研究大会のボランティアなどの学内での課外活動と、県内外施設・団体の募集していたボランティアなどの学外活動であった。恒常的にこのような課題を課すためには、参加可能な課外活動を紹介するための連携体制が不可欠である。今回は、本学地域連携室の「ぶらボラ」を活用するよう促したり、実習担当教員のもとに情報を集めて掲示したりした。

さて、模擬保育は2年後期に教育実習Ⅰで学修した内容であるが、それ以降、学生たちは保育実習や教育実習で子どもたちと共に保育現場で設定保育を行って実践的指導力を身につけてきた。これまでの様子を知った上で今回の模擬保育を見ると、いずれの学生にも成長が見られた。多くの小グループでは、共同して作成した指導案に基づいて、誰が行っても十分な指導性を発揮できていた。

この成果を踏まえたうえで、模擬保育には次の4つの課題がある。第1には、この時期に2年後期と同じ形での模擬保育には、学生に挑戦するような勢いに欠ける例が一部に見受けられたことである。その原因の一つは、学生の心中にさらに上の目標に向けて成長しようとする意識が低いということがある。例えば、模擬保育の担当小グループの中には、子どもの活動を十分に予想していなかったり、活動の展開を十分計画せずに当日思い付きで活動を付け足すことになったり、まとめてねらいを十分意識できていなかったりした学生たちもいた。また、担当小グループではない学生たちの間にも、事前配布されていたにも関わらず当日実施する指導案を読んでこないというような姿が見られた。これらは、これまでの学修を十分生かしていない学生たちの現状を示していると同時に、指導者側の課題も示している。学生たちの中には、6月に最後の実習が終わって以来、指導案計画や保育実践から遠ざかってしまっている者もいる。我々指導者は、学びを維持させる工夫を考えていかなければならない。

模擬保育に関する第2の課題は、模擬保育の環境を多様に用意し、学生たちに選択させる方式も今後考えていく必要があるのではないかとということである。例えば、一斉指導型だけではなく、自由保育型の模擬保育ができるような環境を整えることはできないだろうか。また、模擬を超えて、実際に保育現場に入って子どもたちと関わって演習する可能性も探る価値がある。

第3の課題は、模擬保育の評価方法の検討を継続することである。平成26・27年度は、小グループで行う計画・実践に対してルーブリック評価を行ってきた。個別にみれば、模擬保育に積極的に取り組む学生とそうでない学生とがいるため、まとめて評価することに躊躇する場面は多い。そのため、小グループ内で一丸となって準備に取り組むように指導するとともに、評価票に個別の様子を書き込める欄を設けている。しかし、もっと個別の取り組みを踏まえて適切に評価できる方法があるのではないか。今後も評価方法の検討は続けていく必要がある。

最後に第4の課題は、模擬保育を通じた学びを文字化する機会を設けることである。平成26年度から、毎回の授業には学生が授業中にワークシートに記入して提出を課しているため、学生が感想や気

づきをつづる授業記録を用意していない。しかし、模擬保育においてはワークシートなど何も用意していないため、気づいたことなどを学生がまとめる仕組みがない。模擬保育後の検討会で意見などを述べても言っぱなしになる。すべての回を通して授業記録を記入させるか、模擬保育専用の記録用紙に記入させるか、検討が必要である。